

巽和行名大教授がIUPAC会長に就任

新会長としての抱負

IUPAC 会長・名古屋大学物質科学 国際研究センター教授 巽 和行

2010年から2年間IUPAC副会長を務めた後、本年1月から会長に就任した。基礎と応用の両面から世界の化学を俯瞰する、そして化学の良識を代表する国際機関の会長となり、その責任の重さを痛感している。

第一次世界大戦直後の1919年に仏英米伊白5カ国によって設立されたIUPACは、翌年12カ国の代表からなるCouncilの設置によって体制が整った。1925年には28カ国代表からなる組織へと発展したが、我が国は1921年にすでにIUPACに加盟している。早い時期の加盟は日本が第一次世界大戦の戦勝国であったことにもよるが、当時の我が国の化学がすでに高い国際水準に達していたことの証でもある。先達の努力と国際感覚の高さには感服するばかりである。ワシントン会議で日米英仏の四カ国条約が調印されたのが1921年（大正10年）であり、原敬首相が東京駅で暗殺された年、日本でメートル法が公布され、アインシュタインがノーベル賞を受賞した年でもある。また、東京化学会が日本化学会と改称されたのも1921年である。

このように、日本の化学界は古くからIUPACと密接な関係にある。すでに1928～1930年に桜井錠二元学術院院長がIUPACの副会長（当時副会長職は5～6名）に就任されており、1934～1938

年には、松原行一元日本化学会会長が副会長になられた。その後、副会長職（1979～1981）に続いて会長を務められた長倉三郎前学術院院長をはじめ、多くの日本人化学者がBureau及びDivision Presidentなどの要職、そしてDivisionや様々なCommitteeの委員としてIUPACの活動に参加している。本年も新たに、Division I（物理化学）の部会長に就任する山内薫教授をはじめ、多くの日本人が要職を務めている。新会長に就任するにあたり、多才な日本人化学者と一緒にIUPACの活動を推進できることは心強



巽和行 IUPAC 会長

い限りである。

2011年はIUPACによる世界化学年として、世界各国で数多くの催しがなされた。我が国においても、世界化学年日本

巽和行教授のIUPAC会長就任に寄せて

日本化学会会長 岩澤康裕

巽和行教授（名古屋大学物質科学国際研究センター長）がIUPAC会長に就任した。長倉三郎前学術院院長が1981～1983年に会長を務められて以来30年ぶりのことである。日本化学会・化学界にとり名誉なことであり今後の活躍を大いに期待したい。

IUPAC（International Union of Pure and Applied Chemistry: 国際純正・応用化学連合）は、世界各国の化学者を代表する機関（日本では日本学術会議）によって構成される自発的・非政府・非営利の国際学術団体であり、1919年に現在の名称と組織が確立した。日本の窓口は日本学術会議の化学委員会IUPAC分科会であり、日本化学会がその活動を側面から支援している。IUPACコンGRESSが隔年に世界各地で開かれており、その第26回が1977年9月に東京で開催され、日本学術会議と日本化学会が共同主催した。

IUPACは、あらゆる見地から純正・応用化学の進歩、学術交流に貢献すること、化学の問題に関して種々の国際学術機関に助言すること等を設立趣旨としているが、よく知られている活動は、新元素名の決定、化合物命名法の規定、物理量・単位の決定、標準化などであろう。また、「世界化学年」（International Year of Chemistry: IYC2011）はIUPACが呼びかけ実現したものである（テーマは“Chemistry—our life, our future”）。

人類社会は、有限の地球上における資源の不足・枯渇、エネルギー問題、気候変動や環境劣化、新興・再興感染症、自然大災害等をはじめとする様々な地球規模の問題に直面しており、それらの解決に向けて科学・技術に対する期待が大きい。それらの問題の多くに化学の貢献が求められている。2012年、化学の総力を挙げて国難に対応し、我が国の力強い将来を構築するため、持続可能な社会を支える人材の育成と増進を図るため、化学が貢献すべきである。

60カ国の学術機関が参画しているIUPACに対する期待がますます高まっている。巽教授のリーダーシップとIUPACの活動に期待したい。

委員会が設置され、産官学の化学系諸学協会や企業を中心として非常に多くの企画が実施されたことは皆さんもご存知のことと思う。日本化学会会員の方々との熱心な協力に大変感謝している。

会長任期の2012～2013年では、世界化学年の盛り上がりを継承し、化学とIUPACの隆盛に弾みをつけたい。化学用語や化学データの標準化、化学研究の国際協力と教育支援の推進などのIUPACの従来活動をさらに充実させることはもとより、環境問題解決など世界が直面する諸課題にも素早く対応して化学に対する国際社会の期待に的確に応えられる体制づくりをめざす。世界の現状と動静を見極めつつ、IUPACが、1) 持続可能社会の実現のための諸課題にスピード感をもって取り組むこと、2) IUPACの存在感と社会へのかかわりを向上させること、そして3) 2019年のIUPAC100周年を視野に入れ、国際的貢献の活動をさらに高めていきたい。そのために、各国化学系諸団体及び国際科学会議(ICSU)やユネスコ、さらに国際オリンピック委員会などとの連携を強めたい。詳細については、IUPAC機関誌*Chemistry International*のVice-President's Column: <http://www.iupac.org/publications/ci/2010/3206/oc.html>と<http://www.iupac.org/publications/ci/2011/3304/oc.html>と、同誌Vol.34, No.1 (2012)のPresident's Columnを参照していただきたい。

日本化学会では、「国際化」を緊急の課題として様々な取り組みがなされている。

日本化学会は異新会長をサポートします

日本化学会常務理事 川島信之

IUPACは、1884年にベルギーで開催された国際化学会(International Association of Chemical Societies)を端緒とし、1919年に現在の名称と組織が確立した。世界各国の化学者を代表する機関によって構成される自発的、非政府、非営利の国際学術団体である。(1)加盟国の化学者間の学術協力・交流を促進すること、(2)純正・応用化学に関して国際的重要性を持つ諸問題で、規制あるいは調整、標準化、規則の作成などを要する事項につき検討すること、(3)化学に関連する問題を処理する他の国際機関と協力すること、(4)その他、あらゆる見地から純正・応用化学の進歩に貢献することを目的としている。

我が国は、設立当初から積極的に関与し、多くの化学者が役員などの要職を務めてきた。現在8つのDivisionとその傘下の小委員会やプロジェクトにおいて、活動を行っている(表)。また、約10のCommittee中で、CHEMRAWN委員会(環境問題等世界の諸問題に企業の見地から取り組む委員会)とCOCI委員会(化学と工業に関する委員会)ならびに化学教育委員会で、それぞれ、廣本和彦/昭和電工と石田英之/阪大、鎌田正裕/東京学芸大が活動を行っている。本年より、川島信之常務理事が財務委員会委員、事務局林和弘課長がCPEP委員会(印刷物、電子版の発行、情報管理等を行う委員会)委員を務めることになっている。

表 8 Divisionと日本人の活動例(2012～2013年)

8つのDivision	主な日本人メンバー
Physical and Biophysical Chemistry (I)	山内薫/東大
Inorganic Chemistry (II)	酒井健/九大
Organic and Biomolecular Chemistry (III)	福住俊一/阪大
Polymer (IV)	澤本光男/京大
Analytical Chemistry (V)	本水昌二/岡山大
Chemistry and the Environment (VI)	田中啓司/MC緑化
Chemistry and Human Health (VII)	長野哲雄/東大
Chemical Nomenclature and Structure Representation (VIII)	荻野博/東北大名誉

日本化学会は、IUPACの活動の様々なサポートを実質的に行ってきた。化合物命名法専門委員会 荻野博(東北大学名誉教授)、原子量専門委員会 海老原充(首都大学東京)、単位・記号専門委員会 志田忠正(神奈川大学)、IUPAC賛助会員委員会(日本の賛助会員数は30団体であり、他国を凌いで世界第1位)などの委員会活動を通じた出版や情報発信、IUPACを母体機関とする国際会議の開催、それらを支える事務業務などである。これらの活動にさらに尽力することにより、日本の化学の存在感を向上させるとともに、異和行新会長をバックアップしていく考えである。

る。IUPAC会長としての活動を通じて、本会が国際的存在感を増して世界規模で発展するのに力添えができれば幸いである。また、我が国の化学企業が海外での

技術教育支援などで積極的に国際貢献を行う際の橋渡し役になりたいと思っている。会員の皆様方のIUPACに対する理解とご支援を切にお願いしたい。